

北辺の海

蝦名
恵

* 登場人物

大友美咲 (22) (5) 大学生
桂木涼太 (20) 大学生
大友静枝 (52) 美咲の母
大友裕昭 (36) 美咲の父
観光客 A
観光客 B
大学生 A

二つに割れた鹿の角のペンダントヘッドがぶつかり合い、鈍い音がする。

美咲(22)N「鹿の角でできたペンダント。

確かムースという大きな鹿だと思う。ペンダントの皮ヒモは擦り切れ、二つに割れたヘッドの飾り。父からもらった最後のプレゼント」

静枝(52)「せっかく、就職も決まっていたのに、今からまた別の大学に入らなくてもいいんじゃない」

美咲「ごめん、お母さん。本当にごめんなきい。バイトして学費は払うし、迷惑はなるべくかけないようにするから」

静枝「それも網走にある大学だなんて。植物の研究なら東京の大学でもできるでしょう」

美咲「うん。そうだけど。どうしても行きたくないの。あそこで勉強したいのよ」

静枝「(ため息をつきながら) やっぱ親子ね。あの人にそっくり」

美咲「そう。似てる？ 私はお父さんのことよく覚えてないから」

静枝「こうと決めたら、絶対なんだから。本当、そっくり」

美咲「私はお母さんに似たんだと思うけど。こうと決めたら、絶対にするっていうところがある」

静枝「(笑いながら) もう、この子ったら」

美咲「お母さんも私が家を出た後、吉行さん

と二度目の新婚生活、楽しんで」

静枝「イヤね。新婚って。そんな年じゃないわよ」

おだやかな波の音。

パシヤパシヤと水の音をたてる子供の足音。

子供の笑い声。

美咲(5)「見つけた。すごく、きれいな貝。見て、見て、お父さん」

大友(36)「どれどれ。本当だ。きれいだね」

波の音。
砂浜を歩く音。

大友「すごいだろう、美咲。ここは大昔の人たちが生活していた場所だよ」

美咲「大昔の人たちって、美咲のおじいちゃんやおばあちゃんたちのこと」

大友「(笑いながら) 違うよ、おじいちゃんやおばあちゃんより、ずっとずっと昔の人だよ」

美咲「(驚いて)へえー」

大友「その人たちはこのオホーツクの海に向こうから来たんだよ」

美咲「海に向こうから来たの」

大友「そうだよ。海に向こうから来たオホーツクの人たちだよ」

美咲「オホーツク人か」

大友「これはモヨロ貝塚。オホーツク人の暮らし方がわかるんだ」

美咲「ふーん」

大友「歴史が好きだった床屋さんがここを発見したんだ。すごいね。美咲も大きくなったら、オホーツクの研究をしてみるか」

美咲「研究？美咲は研究はしないの。お花屋さんになるの」

大友「そうかお花屋さんか」

美咲「いろいろなお花を売るのでよ。お父さんにも好きな色の花束を作ってあげるわ」

大友「そう。ありがとう」

美咲「お父さんは何色の花がいいの？」

大友「そうだなあ。オホーツクの海の色と同じのがいいかなあ」

美咲「海の色。わかったわ。青色の花をたくさんにして、花束を作ってあげる。約束ね」

大友「ああ。楽しみにしているよ」

美咲「ねえ、お父さんは大きくなったら、何になりたいの？」

大友「(笑いながら) お父さんかい。お父さんはオホーツク人になりたいな」

美咲「オホーツク人って・・・変なの」

大友と美咲の笑い声。
遠くで波の音。
海鳥の鳴き声。
館内を歩く靴の音。
近づいてくる靴の音。

桂木「(20)」「(小さな声で)先週も確か、

この北方民族博物館に来ていましたよね」

美咲「(22)」「(ためらいがちに)ええ・・・」

桂木「ずいぶん熱心に見学されているので印象深くて」

美咲「はあ・・・」

桂木「僕はここのボランティアガイドです」

美咲「そうですか」

桂木「正式には代理で。だから、あまり詳しくはないんですけどね」

桂木の小さな笑い声が館内に響く。

桂木「歴史研究会の先輩がサッカーの試合で

骨折しちゃって。それで急に代理を頼まれ

たんですよ」

美咲「そうなんですか」

桂木「歴史研究会といっても、僕は幽霊部員

で、ほとんど活動には参加していないんですよ。それがなぜか、僕に代理を」

美咲「(小さな笑い声で)ふふふ」

桂木「なにしろ、農大の学生ですから、もと

もと歴史は専門外で。この博物館ではトイ

レの案内くらいしかできないんですよ」

美咲「農大ですか。私もそうなんですよ。入

学したばかりですけど」

桂木「新入生。じゃあ、タメ口でもよかった

んだ」

と思うけど・・・」

桂木「(慌てて)そんなことはないでしょう。

ぜんぜん見えないですよ、本当に」

美咲「ありがとう。お世辞でもうれしいわ」

桂木「博物館には授業のレポートとか何かで来て

ているんですか？」

美咲「いいえ」

桂木「じゃあ、趣味で北方民族の研究をして

いるとか」

美咲「違うわ。少し興味があるだけ」

桂木「そうなんだ。僕よりあなたの方が詳しく

ガイドできたりして」

美咲「まさか。私なんて」

桂木「でも、あなたは展示物の見方が違うん

ですよ、普通のひと」

美咲「そうかしら。同じだと思うけど」

桂木「博物館でわからないことがあったら、

いつでも僕に聞いて下さいね」

美咲「(驚いて)えっ?あなた、さっき、ト

イレの案内くらいしかできないって、言っ

ていたわよね」

桂木「はい。他に、もう一つ。学芸員さんを

つれてくることもできるんです。そういう

仕事は早いんですよ」

美咲と桂木、吹き出すように笑い、館

内に笑い声が響く。

美咲と桂木、「シート」と言って、声

桂木「博物館はいいですよ。この雰囲気、

嫌いじゃない。何か落ち着くんですよ」

美咲「ええ、私もそうです」

桂木「うれしいなあ。話が合う人に会えて」

美咲「博物館独特の明るさとか、匂いとか、

静けさとか。ここにいると時間の流れが心

地良くて・・・」

桂木「ふーん。やっぱり大人だなあ。考え方

が」

美咲「イヤだ。私、そんなにおばさんかしら」

桂木「そういうことではないですよ。今度、

よかったら歴史研究会の部室に遊びに来ま

せんか」

美咲「それって、勧誘？」

桂木「そうとも言うかな」

美咲「でも、あなたは幽霊部員なんですよ」

桂木「幽霊も出る時は部室に出るんですよ」

美咲「(笑いながら)そう。じゃあ、頭の隅

にでも入れておきます」

桂木「本当ですか。待っていますよ」

博物館の遠くの方で観光客たちのざわ

めき。

観光客A「トイレ、どこやろ」

観光客B「どこやろね、トイレ、トイレは」

桂木「お客様、お手洗いはこちらでございます

観光客A「あつ、そうか。兄ちゃん、ありが

とさん」

桂木「どういたしまして。ごゆっくり」
美咲「(つぶやくように) おもしろい人」

携帯電話の呼び出し音。

美咲「お母さんだわ」

静枝「美咲、元氣？」

美咲「元氣よ」

静枝「さみしくない」

美咲「さみしくないわよ。そっちこそ、元氣」

静枝「お母さんはいつでも元氣よ」

美咲「そんなにしょっちゅう、かけてこなく

ても大丈夫よ、子どもじゃないんだから」

静枝「だって、一応、私だって、母親だから。

そうそう、探し物は見つかった？」

美咲「探し物？」

静枝「何か探しに行ったんでしよう。網走ま

で」

美咲「勉強しに来ているだけよ」

静枝「そう。そうだったの」

美咲「変な事、言わないでよ。用事がないな

ら、切るからね。それじゃあ」

携帯電話の切れる音。

鹿の角のペンダントヘッドがぶつかり合う音。

おだやかな波の音。

海鳥の鳴き声。

大友「美咲、お父さんはお母さんと別々に暮らすことになったんだ。お父さんは網走に。お母さんは美咲と東京に暮らすんだよ」

美咲(5)「イヤだ。美咲もここにいる。お父さんと一緒にここにいる」

大友「美咲が残るとお母さんがひとりぼっちになるだろう」

美咲「じゃあお母さんも残ればいい」

大友「お母さんは東京で大事なお仕事があるんだ。お父さんもここで仕事をしながら、勉強をしたいしね」

美咲のすすり泣き。

大友「美咲はいい子だよ。お母さんはひとりだとさみしがるから、美咲がついていてあげてほしいんだ。ねえ、わかるよね」

美咲の泣きじやくる声。

大友「いい子だ。美咲は本当にいい子だから、泣かないで」

美咲「(泣きながら) お父さんはさみしくないので。美咲がいなくなっても。ひとりぼっちでも」

大友「さみしいよ。でも、お父さんは男だからがまんできる」

美咲「(泣きながら) わかった、わかったよ。でも、美咲はやっぱりさみしい」

大友「うん、そうだよね。そうだ。美咲にいい物をあげるよ」

美咲「いい物」

大友「これさ」

美咲「これ、何？貝なの、それとも石」

大友「ムースという大きな鹿の角で作ったお守りのペンダントだよ。さみしくなったら、これを見ろといい」

美咲「うん」

波の音。

鹿の角のペンダントヘッドがぶつかり合う音。

郷土博物館内、古い板張りの床を歩く靴音が響く。

近づいてくる足音。

桂木「ここにもいた。偶然だなあ」

美咲(22)「(驚いて) あら。ここでもボランティアガイドを」

桂木「いいえ。今日はプライベートで」

美咲「そう」

桂木「やっぱり、すごく興味があるんじゃないですか。オホーツクの歴史について」

美咲「少し、好きだけよ」

桂木「じゃあ、僕と同じだ」

美咲「そうだったの？」

桂木「じゃなければ、また、同じような博物館で会うわけじゃないでしょう」

美咲「それもそうね」

桂木「嘘ですよ。実は街で見かけたから跡をつけてきました」

美咲「(驚いて) ええ」

桂木「ごめんなさい。誤解しないでください。

けっしてストーリーじゃありませんから」

美咲「うん。わかったわ」

桂木「でも、まさか今度は郷土博物館に行く

とは思いませんでした」

美咲「それ、どういう意味」

桂木「あの・・・少し変わっているというか、

すごく勉強熱心というか・・・」

美咲「イヤだわ。そんなに私って、変？」

桂木「まあ・・・前にも言っていましたよね。

博物館が好きだって」

美咲「ええ、そうね」

桂木「でも、ここに来るっていうことは、そ

れだけじゃないですよ」

美咲「あなただって博物館の雰囲気、嫌いじ

やないって」

桂木「はい、特にこの郷土博物館は昔懐かし

いような感じでいいですよ。よく言えば、

レトロ、悪く言えば、古臭いですけど」

美咲「そうね。ここは昔とちっとも変わらな

い。入口の動物の剥製たち。子どもの頃は

恐かった」

桂木「(笑いながら) そうそう」

美咲「この博物館にはまた違った良さがある

のよね。ここにいると、まるで魔法にかか

ったみたいになんか落ちつくの」

桂木「魔法か。何かいいですね」

美咲「ええ」

桂木「そういえば、モヨロ貝塚で発見された

マッコウクジラの牙製の女性像は向こうの

北方民族博物館に展示されていましたよね」

美咲「北方のヴィーナスとかオホーツクのヴ

ィーナスと言われている女性像よね」

桂木「シャーマン信仰と関係があるという説

が有力らしいですけど、謎の海洋民とかオ

ホーツク文化人とか、ロマンがあつていい

ですよ」

美咲「やけに詳しいのね」

桂木「それくらいは」

美咲「そう」

桂木「網走はいい所ですよ。自然だけじゃな

くて、遠い昔の見えない物を想像させてく

れる場所があるから」

美咲「そうかもしれないわね」

桂木「あなたの名前をまだ聞いていませんで

した。僕は桂木涼太」

美咲「大友美咲です」

桂木「美咲さんか。もしかして親が能取岬の

美岬から名付けたとか」

美咲「・・・」

桂木「ごめん。違った。また、余計なこと、

言ったのかな」

美咲「わからない。でも、そう言われるとそ

うだったのかもしれないわ。今までそんな

風に考えもしなかった」

桂木「いい名前ですよ。美岬にたどりつくの

は流水だけじゃなくて、ロマンあふれるオ

ホーツク文化人だったりするかも」

美咲「(笑いながら) ずいぶんとロマンチス
トなのね」

鹿の角でできたペンダントヘッドぶつ

かり合う音。

おだやかな波の音。

大友「美咲、このオホーツクの海は誰でも、

いつでも待っていてくれるんだよ」

美咲(5)「海が？」

大友「そう。お父さんだって、美咲だって、

待っていてくれる海なんだ」

美咲「(海に呼びかける様に) 海さん、オホ

ーツクの海さん、待っていてね。美咲はち

よつとの間、お母さんと東京に行くけど、

またすぐ帰ってくるからね」

大友「美咲・・・」

美咲「(海に向かって、大きな声で) 海さん、

美咲が帰るまでお父さんと仲良く待ってい

てね」

大友「(少し涙声で) 美咲・・・」

美咲「海さん、海さん、・・・待っていてね」

美咲の声が響き渡り、やがて波の音に
消されていく。

鹿の角のペンダントヘッドのぶつかり
合う鈍い音。

遠くで海鳥の鳴き声。
風で揺れる木々の音。

桂木「やっぱり、ここか」

美咲「(22)」「(驚いて) どうして、ここに」

桂木「オホーツク人に案内してもらいました」

美咲「また、私のことつけてきたの」

桂木「(強い口調で) 違います。次はきつと、

ここで会えると思ったから」

美咲「・・・」

桂木「狭い町だもの。博物館に来ない日は、

このモヨロ貝塚に来るでしょう」

美咲「今度は、変わっているんじゃないかと、

私って単純なのかしらね」

桂木「好きなんです。オホーツク人」

美咲「ただ見つけに来ただけよ」

桂木「オホーツク人を？」

美咲「違う。・・・父を・・・」

桂木「お父さんを」

美咲「正確には亡くなった父との思い出なん

だけど」

桂木「そうなんだ」

美咲「博物館もそうだけど、子どもの頃、父

とよくこのモヨロ貝塚にも来たの」

桂木「美咲さんはずっと網走に住んでいるん

ですか」

美咲「子どもの頃、少しの間だけね。あとは

東京に。桂木さんはずっと網走に」

桂木「いいえ。親が転勤族だから、道内を点々

と。僕も子どもの頃、何年間か網走にいた

だけです」

美咲「そう」

桂木「結局、大学に入って、こっちに戻って

きたみたいになったんですけれど。オホーツ

ク海に呼び寄せられたのかな」

美咲「私も同じかもね」

桂木「お父さんとの思い出の場所っていいで

すね」

美咲「・・・うん。父は母と別れて、一人で

網走で暮らしていたの。私は母と二人で東

京にいて、父とは五才からずっと会ってい

なかった」

桂木「そうだったんですか」

美咲「四年前に父が亡くなってから、急に忘

れていた父との思い出が蘇ってくるように

なって」

桂木「そう」

美咲「五才で父と別れた時は子ども心に父と

の思い出を忘れようと心を閉じていたのね、

きつと。でも、父の死によってそれが開い

てしまつて、自分でも押さえきれなくなっ

て・・・」

桂木「それでお父さんとの思い出を見つけに」

美咲「おかしいわね。いい大人が」

桂木「そんなことないですよ」

鹿の角のペンダントヘッドがぶつかり

合う音。

美咲「これね、父からもらった物なの。二つ

に割れてしまつたけど、ムースという鹿の
角のペンダント」

桂木「ムースって大きな鹿ですよ」

美咲「そうね。北方民族博物館にも鹿の角で

できた物がいろいろ展示されていたわ」

桂木「だから、博物館であんなに熱心に見て

いたんです」

美咲「展示物を見ていると、昔のように、父

と話をしているみたいな気持ちになつて」

桂木「そうか。(小さな声で) だから・・・」

美咲「でも、見れば見るほど、後悔する気持

も強くなつてくるの。遅すぎたのよ。どう

して、もっと早くに来なかつたらんだろう」

鹿の角のペンダントヘッドがぶつかり

合う音。

美咲「父との思い出を見つけたって、それは

ただの思い出。生きている父の姿ではない

のよ。ただの自己満足」

桂木「美咲さん」

美咲「於不津くの もよろのうらの 夕風に

いにしよ志のび 君と立つかな」

桂木「金田一京助の歌ですね」

美咲「そう。ここに来ると、父はいつもこの

歌を詠んでくれた。今は忘れかけていた父

の声も歌と一緒に蘇ってくるのに。何か悲

しい」

桂木「いい歌ですよ。僕もこの歌をモヨロ

貝塚に詳しい人に教えてもらいました」

美咲「詳しい人に？」

桂木「子どもの頃、転校してきて、学校に馴染めない時があつて、放課後、よくモヨロ貝塚とか郷土博物館に行っていたんです」

美咲「それで、いろいろと知っていたのね」

桂木「そこで、時々、会うおじさんがいて、この歌の話とか教えてもらいました」

美咲「おじさん？ねえ、そのおじさんの話、覚えてる？」

桂木「子どもの頃だったから、よく覚えていないけど、モヨロ貝塚を発見した床屋さんの話とか・・・オホーツク文化人の話とか、とにかく何でもよく知っている人でした」

美咲、突然、すすり泣き始める。

桂木「大丈夫ですか」

美咲「(泣きながら) ええ。ごめんなさい」

桂木「僕、また変なこと、言ったのかな」

美咲「違うの。あなたの会った人って、私の父かもしれないと思って」

桂木「(驚いて) ええ」

美咲「その人、他にどんな話を」

桂木「話ですか。うん、そうだなあ。ああ、僕が生意気にも親のせいで転校ばかりしているから、故郷がないようなことをはなしたんですよね」

遠くで波の音。

桂木「その人、優しく言ってくれました。オホーツクの海は待っていてくれるよって。海は誰でもいつでも故郷のように待っていてくれるよって」

美咲「(泣きながら) そう、そう。やっぱりお父さんね。私にもそう、優しく言ってくれた」

桂木「偶然ってすごいなあ」

美咲「本当ね」

桂木「お父さんの言うとおり、オホーツクの海は美咲さんも僕も待っていてくれたんですね」

美咲「ええ」

桂木「美咲さん、遅すぎたことはなかったんですよ。あなたはちゃんとお父さんと話ができたじゃないですか」

美咲「お父さん？」

桂木「博物館でもモヨロ貝塚でも。僕にはそう見えていましたよ」

美咲「桂木さん」

桂木「お父さんは、いつでも美咲さんの心にいるんですよ」

美咲「ありがとう」

桂木「於不津くの もよろのうらの 夕風にいにしよ志のび 君と立つかな」

桂木の声が大友の声に変わっていく

大友「於不津くの もよろのうらの 夕風に

いにしよ志のび 君と立つかな」
美咲「お父さん」

遠くでおだやかな波の音。

携帯電話の鳴る音。

美咲「もしもし、お母さん」

静枝「あら、美咲、あなたからかけてくるなんて珍しいわね」

美咲「探し物は見つかったわ」

静枝「あら、そう。よかったわね」

美咲「お母さんは初めからわかっていたんでしよう。私の探し物」

静枝「見つかったのなら、いいじゃない」

美咲「偶然であるのね。いや、偶然じゃなくってつながっていたのかな、やっぱり」

静枝「少し気持が楽になったみたいね」

美咲「うん。ありがとう。もう大丈夫だから」

静枝「そう」

美咲「お父さんね、本当にオホーツク人になったのかもしれないわ」

静枝「オホーツク人？」

美咲「上段よ。そんな気がただけ。それじゃあ、またね」

携帯電話の切れる音。

大学のキャンパス内、学生達の声。

楽器の音などが響いている。

7

美咲「歴史研究会の部室ってここかしら」

ドアをノックして開閉する音。

美咲「こんにちは。失礼します」

男子学生A「はい」

美咲「こちら歴史研究会ですか」

学生A「そうですけど」

美咲「桂木涼太さんという方の紹介で来たんですけど」

学生A「桂木涼太？そういう名前の学生は会にはいませんけど」

美咲「北方民族博物館でボランティアガイドをしていた人なんです」

学生A「ガイドですか。ガイドなら僕が時々してましたけど。サッカーの試合で骨折してからはしばらく、行ってないなあ」

美咲「・・・そうですか」

学生A「その人が何か・・・」

美咲「いいえ。いないのなら、いいんです」

風の音。

風でドアが閉まる音。

鹿の角でできたペンダントヘッドがぶつかり合う鈍い音がする。

Σ